

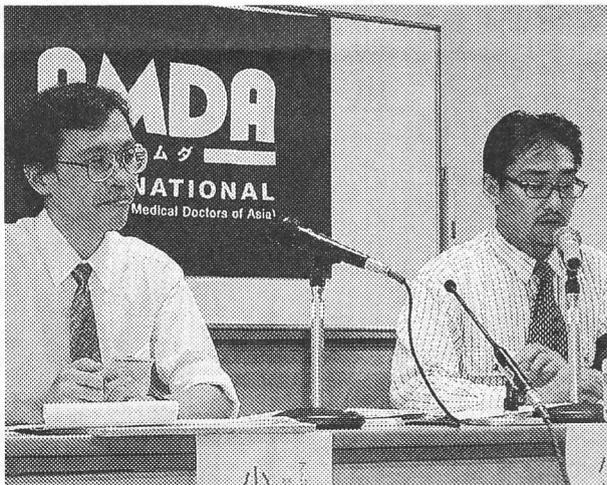
テロ事件
医療支援

アムダの2人帰国

心のケア 緊急課題に

NYのアフガン周辺情報収集へ 現状語る

米国での同時多発テロ事件を受け、岡山市に拠点を置く医療NGO（民間活動団体）「アムダ」（AMDA）がニューヨークに派遣していた医師ら2人が帰国し、二十六日、岡山市で記者会見した。現地ではまだ煙が立ち込めるなど復旧作業に追われているが、けが人などは初期治療が終わり、被害者やその家族の精神面のケアが緊急の課題となっているという。アムダでは今後、対テロ軍事行動が起きた場合に備え、アフガン周辺などとの情報連絡を密にする（エ）にしている。



現地の様子などについて話す小西局長（左）と小林医師（岡山国際交流センターで）

派遣されていたのはアムダ本部の小西司・緊急救援対策局長(37)と東京都の小林直之医師(36)。二十一日に出発し、倒壊した世界貿易センタービルがあるマンハッタン島内の四病院などを回って現状を視察、阪神大震災の時から協力関係にあるユダヤ系国際協力団体「AJWS」を訪ね、義援金として一万が(約百二十万円)を寄贈、二十五日に帰国した。

岡山市奉還町の岡山国際交流センターで二人は「現場から百ほどのところまでしか立ち入れなかったが、周囲はまだ煙が立ち込めていた。折れた鉄骨を載せた大型トラックが頻繁に行き交い、市民も悲痛な面持ちで歩いていた」と現地の惨状を生々しく語った。

また、街頭のあちこちに星条旗が掲げられ、雑誌の表紙にはテロの首謀者とされるウサマ・ビンラディンの顔写真が大々的に掲載されていたといい、小西局長は「目にしたこのない光景だった。国民は今後の

軍事行動には理解を示している様子だった」と話した。

また、現地の病院では、発生当初は二百十六百人の負傷者を受け入れたというが、多くが軽傷ですでに退院。このため小林医師が直接医療に携わる必要性はなかったが、「心的ケアのための支援センターが設立されるなどの動きが進んでおり、特に低所得者層に対する支援の必要性を感じた」という。

こうした状況から、アムダでは米国への二次派遣は予定していないが、アフガン周辺での軍事行動による難民支援などに備え、パキスタン連絡事務所などと連絡を取り合い、情報収集することになっている。